小さき家の生活

宮本百合子

一九二一年の十一月十四日、自分は不図、自分等の小さい家庭生活の記録を折にふれて書きつけて行く気になった。
　或年まで生活し、後、振返って其経験を分解し、観察して見ることは、勿論興味あることだろう。然し、そうではなく、幾年か、感興が起るにつれて、その当時の心境なり、事件なりを、如実に描くことは又楽しい。結婚後、まる二年の年月を経、今、自分は、少くとも当面の生活には馴れたことを感じる。同時に落付いた。胸をわくわくさせるような物珍らしさが去った代りに、又文字に書き写せる丈、心に余裕が出来たの

である。何年まで此が続くか、如何那ことが起って来るか、書く私自身も知り得ない未来が、我々の将来には横って居る。

家

Ａが帰朝したのは、一九二〇年の四月二日である。帰った時、私は横浜から真直に彼をＨ町に伴った。勿論二人の棲むべき家が、何処に在り、如何なるものだかも問題にして居なかった。

第一彼の職業がまだ定って居ない。どれ程月給が取

れるものだか、又どれ程人間二人の生活費が必要なものだかも分って居ない。私は、当分H町の、離れた二部屋を自分等の巣とする積りで居た。

十幾年振りかで故国に帰り、それと、結婚したからこそ帰る気にもなったと云うような彼に対して、自分は、あらゆる温みをこめて、此小世界に幾月かを費すことを信じて居た。

私の部屋として建てられた八畳と四畳ほどの部屋は、自分等二人を容れるに狭くはないだろう。私のために、出来る丈快く、出来るだけ閑静にと考えて建てられた場所は、彼にもそのプリブレージを味わせて充分潔よ

いものであると信じて居たのである。

けれども、十五日も経つと、自分は、期待に反した苦痛を味わなければならないのを知り始めた。非常に工合が悪い。

Ａは、私一人に深く結びついては居ても他には父を除いて余り馴染みない周囲に対して、そう自由には振舞えない。彼の性格が、そんな呑気さを許さない。従って、どうしても、自分等の場所と定った部屋に籠って、私を傍に持ちたいのである。

然し、長年、私を「Ｙちゃん、一寸！」と一声呼んだ丈で自分の傍に所有出来た家族は、何となく第三者

の侵入を意識する。何となく拘泥する。
私には、両方ながら自然に思われるけれども、実際の問題に当っては、非常に神経を使い、苦しまなければならないのである。
特に、自分の場合では、お前が自分で引込んだものと云う心持が、暗々裡に彼等を暗くして居たのではあるまいか。女中の忙しさも、食事時の混雑も、要するに彼が殖えた為だと云う、uninvited guest の煩さを彼女等の眉に読む。両方を愛す自分は、心の痛むのを感じる。夕飯の時、台所に出て女中を手伝い、
「御飯よ」

と云い乍ら皆を呼んで歩くことは、決して、先のように楽しい、活動的な悦楽ではなくなってしまったのである。

　母が、元、私に養子をする積りであったと云うことが、一方問題を一層混乱させた。

「Ｃ・Ｏ」と云う家族の姓名に、殆ど世間知らずに近い愛すべきグローリーを感じて居る彼女は、Ａが、彼の名をすて、それに属することによって、遙によい社会的地位を得、世間の人間の信用を増し、結局、私の為に幸福になると云われる。が、自分には、それがフェーアであると感じられない。自分は名が何であろうと、

彼と云う人、それ自身を愛したのだ。所謂世間に通用させる為に、姓を変えるなどと云うことは、寧ろ恐るべき人としての屈辱であると主張した。

私は、姓によって、彼を遇することを異るような世間には、世話にならないで生きて行くと云った。真個に、我々が生きて行く世界は其那浅薄なものではないのだ、と断言した。が、母上は、我々の突然な結婚によって受けた苦痛、恥辱の感、それを如何うして償うかと云うことを根拠として、強く、彼女の意見に執されるのだ。

我々にとっても、彼女にとっても、恐らく家族全部

にとって、一九二〇年の春は重苦しく、辛いものであった。

私は、母上の心情にも同情し、理解したが、同時に、至純な、親と云うものの概念に恐ろしい汚点をつけられた。自分は、彼等を何だと思って居たのか、とさえ思った。彼女自身は、自分の愛は、親の愛であるが故に尊く浄く、且つ正当なものであると信じて居られるだろう。然し、実際はどうだ。私の為、私の為と云い、思い乍ら、つまり我意を拡張させようとする。自分が見る丈の世界でよしとするもののみを、我々の上に実現させようとされる。彼程、お前の愛す者なら、良人

として何人も認めると云われはしても、若し、母上の撰択のみに従い、母上の批評にのみよって居たら、恐らく自分の一生は、単に彼女の誇るべきＹ子にのみ終始して仕舞うのだろうとさえ思った。

其時分、自分は、親の愛と云うものに極度の反感を抱いた。それを包んで、彼女を立ててあげようと振舞うような性格に自分は生れ付いて居ない。Ａを取るか、母上につくか。

自分は、どうして責任を以て開いた彼の新生活を絶望させられよう。彼が、私一人の愛によって、何が自分を待迎えるか予想もつかない新生涯に這入ったこと

を思うと、涙が湧いた。此点では、自分も同じだ。もう、母上の憤りと、涙と、哀願によって、愛人を捨てるには、自分は余り一人の人間になって居る。

彼女のヒステリー、私の精神の混乱。Ａや父上の忍耐の幾日かの後、到頭、私共は自分等で、別に家を持つことになった。

Ａは A 家の戸主で、移籍が出来得ない。それならば私は、もう A 家の者になったのだから、良人の家に移るのが当然であり、Ａが、結婚した以上、其位の責任は持つ覚悟だろうと、母上が提議されたのであった。

今、その時分のことを思い出すと、自分は、眼をそ

むけたいような心持さえする。

何故、母上はあれ程、常軌を逸さずには居られなかったのであろう。あんなに賢明であられても、見る宇宙は小さいものであると思い、同時に、子にばかり縋って、その従順の裡にのみ生活の意義を認めて行かれる態度は、真心からお気の毒に思う。私ばかりではない。結婚、恋愛の問題は、Kにも、Hにも、Sにも起って来るだろう。

幸にして、彼女の希望と一致すれば、何も云うことはない。然し、そう行かなかった場合――第一、彼女が標準とする社会的地位、名望と云うものの標準が

異った場合、母上は、又私に於て繰返したと同じ苦悩を経られるのではないだろうか。
自分は、決して彼女が愚でない丈、苦しみの多いのを知り、どうかしてあげたく思う。然し、私の力で、彼女の裡に生え切った性格をどうされるだろう。彼女は左様な点に於ては、私を、子と云う階級の一歩外へも出ることを許されないだろう。
兎に角、私共は、ＡがＫ大学に古典を教える目算がついた許りで、新居を探さなければならないことになった。
全く、家なき者！

私共は、もう夏になり、暑い戸外を二人で、空屋から空屋と探して歩いては、失望して、居辛いわが家に帰り帰りした。

「なに、見つかるものかね。Ａさんにその気がないもの」

「どうして？　でも探して居るのよ。此頃家がないんですものね、困るわ」

「――まあ見て居て御覧。きっと見つからないから」

自分は、母上の皮肉な微笑を、其時理解するに苦しんだ。

Ａは、黙って、毎朝昼近くまで一廻りずつ附近を廻っ

て来る。

〔約二百字欠〕むほどはっきり思い起した。――余り、横道に入らず、又、家のことに戻ろう。

今居る片町十番地の家が見つかったのは、八月の下旬であった。

赤門前に頼み始めた頃から、此処に空家のあることは分って居たのだ。が、自分には余り場所が悪く思われた。恐ろしく貧弱に感じられた。其上、先住が建てた風呂場を二百円で買うか、従来、三十幾円の家を五十円にするか、と云う条件つきなのである。

大家の、虎屋と云う米屋が、家賃をむさぼることで

近所で有名であると云う噂が自分を恐れさせた。出来るなら、其那面倒のない、其那無気味な大家の所有でない家に、仮令暫くでも棲みたく思ったのである。

市外ならば、其程見出すのが困難でもないらしい。然し、自分等二人ぎりで当分はやって行こうとするのに、瓦斯も水道もない処で、どうしよう。要心のことも考えなければならない。

貸家住いと云うことを知らず、家のないなどと云うことが、いつ当面の困難となるか思いもしなかった自分は、憤ろしいほど苦痛を受けた。

一家の中で、他の誰も同様の熱心を示して呉れず、

二人きりで焦慮し、新らしい生活の準備をしようとする心持は、何と云ったらよかろう。お祭りのように所謂お嫁に行った者は、一生経っても、此我等二人、と云う、深い淋しい身の緊る感銘は受け得ないだろう。Aは、国から五百円都合して貰った。其金と、自分等の書籍と、僅かな粗末な家具が新生涯の首途に伴う全財産なのである。

兎に角、いくら探しても適当な家がないので、仕方なく、まだ人の定らない、十番地の家にすることに決定して仕舞った。

敷金と、証文とをやり、八畳、六畳、三畳、三畳、

台所、風呂場、其に十三四坪の小庭とが、我が家となったのである。

　八月の二十八日から九月三日まで、Ａは毎朝早くから、善さんと、新らしい家の掃除に出かけた。善さんと云うのは、出入りの請負の下働で、当時、Ｈ町で、隠居所を建てて居た為、彼は毎日顔を見せた。少し耳の遠い出歯の、正直な男で、子供の居た先住の人が住み荒した廊下、障子、風呂場、台所の手入れに、大工をつれたり、自分で来たりして、助けて呉れたのである。自分は、掃除には一度も来られなかった。二十日以後から体の工合が悪く、熱を出して床について居た。

炎天を、神経質になって家探しや買物に歩き廻ったため、疲労で弱ってしまったのである。

引越しの日は、晴れて暑い残暑の太陽が、広い駒込の通りを、かっと照して居た。

午前中本箱や夜具、トランク類を、石井の荷物自動車にのせ、英男が面白がって後につかまって送って行った。大工、善さん、おまつ等がAに手伝い、略(ほぼ)、片がついたと思う頃、自分は俥で出かけた。

始めて出来た自分等の家に行くのだけれども、母上に

「左様なら」

と云う心持にはなれない。改ったことを云うと、今にも涙がこぼれそうに感じ、二階に居られる処へ行って軽く

「行って参ります」

と云い、何も返事を得ない先に、いそいで玄関から俥に乗った。

始め、此家が今に空くのだそうだ、と云うので、赤門前の男から知らされ、まだ、人が住んで居た時分、或夜、見に来た事があった。

勿論中へは入れない。崖の上の狭い平地の隅から、低い板塀越しに、中をちらりと覗いた丈であった。後、

もう一遍、来たことがある。いずれも夜であった。従って、周囲の有様や、家そのものの感じも、あまり露骨に見えなかった。

処が、只さえ万物を乾き、美しくなく見せる残暑の真昼の中で俥から下りると、自分は、殆ど、一種の極り悪さを感じる程、家は小さく、穢く異様に見えた。武岳と云う医者の横と、葉茶屋の横との、三尺ばかりの曲り口も、如何にも貧弱に、裏店と云う感じを与える。

木戸が開いて居るので、庭へ廻り、ささくれた廊下や、赤土で、かさかさな庭を見、此が自分の家になる

のかと、怪しいような心持さえした。
　Ｈ町に暮して居た種々な、ややアリストクラットな趣味や脆弱さが抜けて居ないので、自分は、静に生活を冥想する場合には、予想し得ないような、階級の差別感に打たれたのであった。
　いきなり格子を開けると玄関になるのを妙に思い、当惑したような微笑を漂せ乍ら、本棚の並んだ八畳を見た。
　Ａは、重い棚を動かし乍ら
「どう？　気に入りますか？」
と訊いた。彼の姿を見、自分は、種々なこだわりを忘

れて

「結構じゃあないの？」

と云った。

「まだ馴れないから変だけれども、段々よくなるでしょう」

「随分、よく日が当りますね。H町より乾いて、お涼しゅうございましょう」

まつが、雑巾を持ち乍ら、庭を見る。成程、気がつかなかったら家は西向で、午後になると、日が、真正面から座敷一杯に差し込むのである。

困ったことだ、と思った。自分は、ひどく眩ゆいの

を嫌う。どうするか、と案じた。が、もう、それを云っても仕方がない。

動くと気分悪く、神経的嘔気を催すので、部屋の敷居の処に倚りかかり、指図をして、近所の蕎麦屋へ行かせた。

職人にやる金を包み、皆に蕎麦を食べさせ、裏の家と医者の家に配り終ったのは、もう夕暮に近かった。

H町に居ては、見られない鮮やかな夕映が、一目で遠く見渡せる。

崖に面した四尺ばかりの塀際には背の高い「ひば」が四本一列に植って居る。その、デリケートな葉が黒

く浮立ち、華やかな彼方の色彩に黒レースをかけたように優雅である。まつを、いつまでも止めて置くことは出来ないので、我々の夕飯の仕度に鰻を云いつけさせて、帰した。

急に四辺が、ひっそりとする。

自分は思わず、真心をこめてＡをエムブレスした。何と云う感銘の深い夕暮だろう。

Ａはおなかが空いて居るのを知り、いつまでも食事が出来ないのを気の毒に思った。やっと、八時頃、命じたものが来る。

自分は、八畳の灯の下に、一閑張の小机を出し、白

く糊の新らしいサビエットを拡げ、夕餐の用意をした。お茶を飲もうとする茶碗も、箸箱も、皆、今度新らしく二人で買い調えたものだ。

卓子に向って坐ると、二人は、感動し、我知らず祈を捧げる心持になった。

今から、自分達の、二人きりの、生活が始るのだ。どうぞ幸福であるように。彼も、自分も幸福であるように。――

箸をとったら、鰻は、まるで油紙のようにくさい。危く自分は感傷的になりかかった。

Aが、又蕎麦屋へ行かなければならなかった。夕飯

を、兎も角済したのは九時過ぎて居たろうか。

引越の前から工合が悪かったので、自分は、又、翌日から床について仕舞った。

H町からまつに来て貰い、翌晩は、ひどく神経的になって、細井さんを呼ぶほどであった。

Aは、さぞ心配されただろう。

然し、其那に長くは悪くなかった。四五日で起きた。

或境遇に、人間が馴致されると云うことは、人々は理論として明に知り、また客観的観察として、屢々口にする。而も、其当人が、自己が如何那境遇を持ち、それに自己の性格のどんな部分を、如何に馴致されて

居るか、深く反省することは、あまり屢々ではないのであるまいか。

Ｈ町の生活は、自分の気位、趣味、余裕ある心持等を養うに、偉大な効力を持って居た。

人間として持つべきだけの威厳、快楽、美に敏感な感情を授けられたことは、生涯、生活を、蕪雑なものにし得ない為に、自分を益して居る。

けれども、彼の如く、上流の下、或は中の下位の社会的地位の者の家庭に滲み込んで居る、子供としての独立力の欠乏、剛健さの退廃と云うものは、確に自分に頭と一致しない矛盾を与えて居たと思う。

幸、性格的に自分は甘たるい、つんとした、そして弱い生活を嫌う傾向を持って生れた。その為に、素朴な、実質的な、草の如き単純さと同時の真に充実した生活を営むべきことと、営みたいことの希願だけは強くあった。

故に、Ａとの結婚は自分を、人間として改造し、見えない無数のアフェクテーションをすてさせるだろうと予覚した。

寧ろ、極貧でないかぎり、富裕でなくてよいと云う心持が、非常に強く自分を支配して居たのである。形式や、据え目や、上品さに煩わされ、流れる水のよう

に自由に生活出来ないことは、実に恐ろしい。芸術家として自己を守り立てようと決心したからは、その力をレデュースし、そのロフティーネスを辱しめるような、あらゆる物は、仮令世上の如何な高貴であっても固辞しようと思ったのだ。

処が、暫く暮して見、自分は、種々な不自由さが、我心の裡に植えられて居るのを発見した。

第一、八百屋、魚屋、そう云う処へ行ったりすることが、ひどく困難に感ぜられる。

なりふりにかまわない自分が、いつ誰が来るか分らないと思って机に向って居るのは、実にいやだ。

それぱかりでなく、ぴったりと生活が落付かず、何だか借りもののようで、不満が裡に満ちる。仕事も出来ない。

此の状態は、自分にとって長すぎる程継続した。随分煩悶した。自分等の生活が肉感的なので仕事が出来ないのかと思ったり、Ａが性格的に自分を煩すのかと思ったり。——然し今、自分には、それ等も少しはあったかも知れないが、要するに、現在日本の社会状態に於ては、芸術に携る女性は、主婦として全責任を帯びたのでは、決して仕事に没頭出来ないと云うことが分った。

自分と云う人並、芸術家は、日常生活に於ても、人並に芸術家として存在する。

女性らしい、或は自分のように家庭を愛し、良人や自分をニートな生活で育てたいと思う者は、どうしても、毎日の生活を、バーレンなものにはして置けない。食事にしろ、部屋にしろ、何しろ気を配る。「人」は、愛する者に奉仕せずには居られない。然し、一方芸術のことは、箇人の全的統一と燃焼とを要求する。

此処に、家庭の主婦として芸術に指を染めようとする者と、先ず芸術を本領とし、愛する者の伴侶であろうとする者との、截然岐るべき点がある。

福島からとりと云う五十歳ばかりの女中が来、自分の生活が一方にはっきりと重点を定めて仕舞うまで、今日考えれば、可哀そうな混乱をしたのである。

母上は、始めから、家などを持っては到底駄目だ、と主張された。当時、それは、直ちに、お前が結婚などをしたのは間違って居ると云う意味に通用したので、自分は、寧ろ決然として其に反抗した。

結婚こそ、自分に大切なのだ。心の中で、あらゆる異性に向って動揺するものがすっかり鎮り、落付くだろう。無自覚でするコケティッシュな浮々さが沈み、真個に延るべきものが、ぐんぐん成育するに違いない

と信じて居たから、自分は、怯じて居られなかった。今、恐らく一生、自分は此反省の誤って居なかったことを感謝し得るだろう。

九月三日に引移って以来、今日（一九二一年十一月二十三日）まで、具体的に小さい変化が我々の巣にほどこされた。

去年の十月、Ａが、中央公論に、オムマ・ハヤムの訳詩、並に伝を載せて、貰った金の一部で、三本の槙、一本の沈丁花、二本可なり大きい檜葉とを買った。二本の槙は、格子の左右に植え、檜葉は、六畳の縁先に、沈丁、他の一本の槙などは、庭に風情を添えるために、

程よく植えた。

庭木は、今年になって、又一本、柔かい、よく草花とあしらう常緑木の一種を殖し、今では、狭い乍ら、可愛ゆい我等の小庭になった。

夏福井から持って来た蘭もある、苔も美しく保たれて居る。あの赤ちゃけて、きたなかった庭は、もう何処にも思い出されない。

家具の新らしいものは、植木よりは少い。大きい海鼠焼の火鉢、風呂桶。今年のお盆に、母上がお金を下さり、重宝な簞笥とワードローブを買った。

目下、H町とAとの間にこだわりのある外、生活は

滞りなく運行して居ると云ってよいだろう。

Ａは健康で、女子学習院、明治、慶応に教え、岩波書店から、彼の最初の著述、「ペルシア文学史考」が出版されそうになって居る。

自分は、正月の太陽の為に南路を書き、日曜や今日のようにＡが家に居、机を並べてやって居る時には、此を書いたり、小品を書いたりして居る。

仕事を、飽くまでコンスタントにやること。然し、無理をせず、真の緊張と感興の持続する限度と、雰囲気とで仕事すること、此を今、効果ある状態と信じて行って居る。

新潮から、来春、単行本が出るだろう。経済的に、自分の得るものは現在の処極僅少である。従って、貯蓄はない。

二人の分を合わせて三百円もあるだろうか。

朝、大抵八時半から九時半までに起る。朝飯後、一時頃まで書きつづけて食事にする。

それから髪を結い、日当ぼっこをし乍ら、読んだり、小さいものを書く。三四時頃Aが帰宅し、夕飯六時。一時間も、肴町、白山の方を散歩し、少し勉強し、風呂に入り眠る。

プルタークの英雄伝を読み、シーザー、アントニオ、

カトウ時代のギリシア、ローマ人の生活を、非常に興味深く覚える。

プルタークは、冷静に彼等を伝記者として扱う心持で居ただろう。然し、今日の我々から見ると、彼自身も亦、彼の書いた英雄共と種々な角度に於て交渉を持った一公民としての、心情を吐露して居る。

家を引越し、もう少し周囲の高級な、部屋ももう一つ位多い処へ行きたい希望がある。然し、目下の所、いつ其が実現されるか難しい。我々の経済状態では、六七十円の家賃は、あまりうれしくない。高く出すと、

出せない時もある心配が要る。

此割合で行くと、二十八坪ばかりあることになる。

これ丈果してあるのか？　処々、実際のプロポーションと異るような感じのする処がある。

［＃図1、家の間取り］

此間から、どうかして、今の家のプランを画いて見たいと思って居た。なかなか出来ない。到頭、今、曲りなりに線を引いて見た。時が経って見たら面白いだろう。此程、単純な平面に区切りをつけるに苦心を要するのを考えると母上が、まるでプランを理解されな

い血統を牽いたのか。可笑しい。

底本：「宮本百合子全集　第十八巻」新日本出版社
１９８１（昭和56）年５月30日初版発行
１９８６（昭和61）年３月20日第２版第１刷発行
底本の親本：「宮本百合子全集　第十五巻」河出書房
１９５３（昭和28）年１月発行
初出：同上
入力：柴田卓治
校正：磐余彦
２００４年２月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。